

ホルスタイン雄子牛の肉牛利用

小竹 森 訓 央 (北大農学部)

1. 牧草主体の生産

試験1 11, 12, 1月生産雄子牛の2シーズン放牧育成肥育(昭和40~42年)

若令放牧がその後の発育にどのような影響を及ぼすかを6, 5, 4カ月齢開始(各群8頭)について検討したが、出荷までの増体量には3群間に有意差なく、4カ月齢の早期放牧の可能性が指摘された。この全頭を粗飼料のみで越冬したが、粗飼料不足から $0.02\text{Kg}/\text{日}$ と発育停滞した。しかし翌放牧シーズンには或る期間放牧地の蹄耕造成に利用したにもかかわらず $1.00\text{Kg}/\text{日}$ 増体し、これは越冬期の発育不良からくる代償性発育によるものと考えられた。各群の半数に出荷前70日間放牧地で濃厚飼料を 350Kg 給与したが放牧肥育と比べ有利性が認められなかつた。出荷月齢と体重は6カ月群: 24カ月 500Kg 、5カ月群: 23カ月 490Kg 、4カ月群: 22カ月 449Kg であつた。各群の哺育から出荷までの濃厚飼料要求率は 0.68Kg (肥育したもの 1.46Kg)、 0.52Kg (1.35Kg)、 0.39Kg (1.19Kg)であつた。

試験2 1, 2, 3月生産雄子牛の2シーズン放牧育成肥育(昭和41~43年)

50頭を供試し、4, 3, 2カ月齢放牧について比較した。1シーズン目放牧では草生不足から重放牧を強いる結果となりそれぞれ 0.38 , 0.35 , $0.32\text{Kg}/\text{日}$ の成績に終わつたが、越冬期と2シーズン目放牧で遅れを取り戻し、2カ月齢放牧の可能性が認められた。試験1の4カ月齢放牧群の1シーズン目増体は $0.58\text{Kg}/\text{日}$ であつたことから補助飼料なしの若齢放牧では開始月齢もさることながら放牧管理が大きく影響するといえよう。試験1でも同様であつたが、1シーズン目放牧直後と7~8月に約1カ月間の発育停滞がみられこの時期の補助飼料の必要性が示唆された。越冬期には各群の半数ずつに濃厚飼料 85Kg と 200Kg 給与したが、これも粗飼料不足から $0.08\text{Kg}/\text{日}$ と $0.15\text{Kg}/\text{日}$ に終わつた。しかし乾草だけの越冬で $0.4\text{Kg}/\text{日}$ の成績(天北農試)例もあり良質粗飼料を充分量与えれば或る程度の濃厚飼料で、 $0.4\sim 0.6\text{Kg}/\text{日}$ の増体を維持できると考えられる。これら供試牛は2シーズン目放牧終了後試験4の仕上げ肥育試験(18頭)、3シーズン放牧試験(18頭)に供し残りは生体販売した。

試験3 10~3月生産雄子牛の2シーズン放牧育成・肥育(昭和42~44年)

この試験では濃厚飼料給与量と給与時期の効果をしるために、①哺育期のみ給与 ②哺育期と越冬期に給与 ③哺育期と2シーズン目放牧に給与 ④哺育期、越冬期および2シーズン目放牧に給与の4処理を試み、現在2シーズン目放牧中である。

試験4 放牧地における予備肥育が仕上肥育に及ぼす効果(昭和43, 44年)

2シーズン目放牧後の仕上肥育において放牧地で2カ月間、1カ月間濃厚飼料を給与し

たものとそうでないもの3群(各6頭)について放牧終了後4カ月間仕上肥育したが、発育飼料要求率、枝肉歩止りおよび枝肉単価に有意差が認められなかつた。出荷月齢は25.5カ月、出荷体重はそれぞれ495, 472, 472 Kgであつた。

試験1～4の結果から牧草を主体とした育成肥育では各時期の増体目標を哺育期(代用乳哺育)0.7～0.8 Kg/日、1シーズン目放牧(若干の濃厚飼料)0.7～0.8 Kg/日、越冬期(或る程度の濃厚飼料)0.4～0.6 Kg/日、2シーズン目放牧(放牧のみ)0.9～1.0 Kg/日とすると2シーズン放牧終了の24カ月齢前後には550Kg以上で出荷でき、これに要する濃厚飼料は500～800 Kgと考えている。

2. 濃厚飼料主体の生産

試験1. 乾燥澱粉粕配合飼料と稲わらによる肥育(昭和41～43年)

澱粉粕の活用と稲作地帯における肥育を目的とし、乾燥澱粉粕50%配合飼料を体重の2.1%と稲わらとで9カ月齢の去勢牛7頭を8カ月間肥育したところ1.00Kg/日の成績が得られ澱粉粕が牛肉生産の濃厚飼料源として有効に利用できることが示された。肥育全期の飼料要求率は肥合飼料6.66 Kg、稲わら2.38 Kgであつたが、肥育が進み体重が大きくなるにつれて飼料要求率が増し、特に濃厚飼料で著しく、濃厚飼料主体の肥育では仕上目標体重をどの程度にするかが大きな問題と考えられる。出荷月齢と体重は16.5カ月434 Kgであつた。哺育から出荷までの濃厚飼料要求率は5.10 Kgであつた。

試験2 濃厚飼料給与水準が肥育効果に及ぼす影響(昭和43, 44年)

平均体重270 Kgの去勢牛18頭を3群に分け43年10月から濃厚飼料を体重の1.2%、1.5%、1.8%と乾草(自由摂取)とで肥育を行なつており、7ないし8月に出荷を予定しているが1.5%群と1.8%群とは発育にほとんど差はなく、飼料要求率の点で1.5%が優り、乾草自由摂取の条件下では1.5%程度の給与が望ましいと思われる。

消流面からみた肉用牛振興上の諸問題

高山 康次(ホクレン畜産事業部)

1. 北海道肉用牛生産振興方針(抜すい) (昭和42年8月17日決定)

第8 流通改善について

肉用牛生産振興上流通機構の合理化による適正価格の形成が極めて重要であるので、つきにより流通の改善を図ることとする。

- (1) 計画的生産出荷態勢を確立するため、農協系統による出荷を推進するとともにその他関係団体の指導を強化し、適正価格取引を推進する。